

セオドア・ローズヴェルトの綴り字改革

——遮られたアメリカ語の追求——

鈴木 健 司

Abstract

In 1906, U. S. President Theodore Roosevelt ordered the Government Printing Office to use phonetically simplified spelling in all the publications of the President and the White House. The 300-word list was proposed by the Simplified Spelling Board, which was financially supported by Andrew Carnegie and was chaired by Brander Matthews. They insisted that simplified spellings would improve the orthography of English, save substantial time and efforts of children when they learn, and make English the dominant language of the world. Though the Executive Order was expected to help promote the spelling reform movement, it sparked a backlash from home and abroad, and TR had no choice but to withdraw his order. While the sequence of events is prone to be taken as a political fiasco due to what were considered to be the whimsical thoughts of the President, TR's decision is related to the fact that he had a considerable interest in the cultural independence of the United States for which language issues occupied its central place. It is helpful to try to understand his efforts to simplify spelling as part of his pursuit of Americanism, which was an important issue for the last half of TR's life.

序

セオドア・ローズヴェルト (Theodore Roosevelt, 以下 TR) は、アメリカ合衆国第26代大統領として在任中の1906年、政府印刷局が發布する全ての大統領文書について、300語から成る英語の簡略綴り字リストに基づいて印刷を行うよう、大統領令を発した。綴り字簡略化の是非は、当時の英米でか

ねてより議論的となっていたが、大統領の発表は直ちに強い反発を呼び起こし、国内外からの批判に晒された。強く賛同する声もあったものの、政治的にも社会的にも支持は広がらず、数か月の後に TR は方針の撤回を余儀なくされた。

この一連の出来事は、多方面にわたって活躍した大統領 TR の、数少ない失政の一コマとして片付けられることが常である¹。彼が「スクウェアディール」や「棍棒外交」をはじめ、内政・外交の両面で多大な業績を残したことにより、歴代有数の偉大な大統領の一人として評価されていることをふまえば、歴史学者からは、酷評を受けて撤回された綴り字簡略化が、政策として稚拙で取るに足らないものとして扱われることは当然かもしれない。また、少なからぬ著書や論考を発表して文壇の人としても名を馳せていたとはいえ、TR は言語の専門家ではなく、綴り字簡略化運動における役割があくまでも政治家として決断を下したというところにあった以上は、彼の仕事が英語史の観点から言語学者に顧みられにくいという事情も、また無理のないところではあろう。

しかし、その社会的反響の大きさに照らして考えれば、TR の綴り字改革への試みが政治史と英語史の狭間で等閑に付されていることは、不当であるように思われる。文筆家として、また政治家として、アメリカ的精神の確立への一貫した視座を持続けた TR の業績を振り返れば、彼の綴り字改革は、決して一時の気まぐれによる政治的汚点として片付けられる類いのものではない。イギリスからの文化的独立が依然として課題であった世紀転換期のアメリカにおいて、独自の正書法の確立もまた TR とその同志たちの重要な関心事だったのである。

本稿では、TR の綴り字改革として国内外の英語圏から注目された1906年の綴り字簡略化運動の経緯を、推進者たちの主張に着目しながら振り返る。そのうえで、ともすれば見過ごされがちな TR の決断の背景にある事情を再検討し、彼のアメリカニズム論との関係から考察していく。

1. 綴り字改革の前身

TR による1906年の大統領令で頂点を迎えたアメリカの綴り字簡略化運動は、英語の綴り字改革の歴史の中でも、際立って大きな社会的注目を集めた事件と言えるであろう。しかし、綴り字簡略化を目指す運動自体は、全く目新しいものでなく、その歴史をはるか以前まで遡ることができる²。

綴り字改革はまずイギリスで始まっており、16世紀半ばにはすでに、英語の綴り字表記の不合理性が問題とされたことが知られている。同時期には一方で、ラテン語やギリシャ語の語源に遡って、発音とは無関係な文字の挿入が行われ、綴り字の不規則化が進んだ。イギリスではその後、表音式速記の発明で知られるアイザック・ピットマン (Isaac Pitman) など幾多の改革者を輩出しつつ、現代へと至るのであるが、ここでは論じない³。

アメリカにおける綴り字改革の目立った動きは、18世紀に始まる。多才で知られたベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin) は、不規則な英語の綴りについても一家言を持ち、1768年、英語の発音を合理的に表すため新たな文字も導入した表音的なアルファベット体系 (phonetic alphabet) を考案して、自らそれを用いて書簡を書いてもいる⁴。かつて印刷業で身を立てたということもあり、特別な鋳型まで用意して新たなアルファベットに基づく辞書の編纂を試みたとされるが、結局、この仕事は完成には至らなかった。

ノア・ウェブスター (Noah Webster) は、独立達成直後1780年代のアメリカにあって、子どもたちの教育に専らイギリスの教科書が用いられていることに、教育者として問題意識を抱き、アメリカ独自の言語を持つことの重要性を説いた。綴り字教則本 *American Spelling Book* の出版で成功したウェブスターは、「独立国家として、榮譽ある存在であるためには、独自の政治のみならず言語においても独自のシステムを持つことが求められる」⁵という信念のもと、新しい綴り字システムを考案した。これは、黙字の省略や変則

的綴りの排除により、従来のアルファベットの枠内で綴り字簡略化を目指すものであった。1790年にはこの新しい綴りを用いて論考を出版したものの⁶ 評判は芳しくなく、彼の綴り字改革に対する急進性は波が引くように後退していく⁷。そもそも彼の活動を支えた経済力が伝統的綴りを収めた綴り字教則本の成功に依っていたことを思えば、この変わり身は当然と言えるかもしれない⁸。それでもその後は辞書編纂者として、イギリス式とは異なるアメリカ式綴りを積極的に採用して、アメリカ語の発達に貢献することが可能になったのである。

ウェブスターの考えによれば、真にアメリカ生まれの語というものはそれほど多く存在するわけではなく、彼の愛国心はむしろ、その辞書にアメリカ人による用例が多数採用されたという事実の方に、最も明確に伺える⁹。しかし、新たな綴りがアメリカ語として、イギリスにおいては伝統からの逸脱として論じられるようになる中で、その正統性を主張するかのように、ウェブスターの辞書はその名称に international という語を冠するようになる¹⁰。そのような動きと並行して、綴り字改革運動もまた、新国家アメリカにおける国民文化の創成という新たな側面を獲得していくことになるのである。

綴り字改革運動は、1870年代後半から英米両国で活発化していく¹¹。米国文献学協会 (American Philological Association) をはじめとする英米の学術団体や教育団体の代表から成る綴り字改革協会 (Spelling Reform Association) が組織され、定期的に会合が開かれ会誌が刊行された。そこでは 11 の語について新たな綴りを速やかに用いることが提唱され、中でも hav, giv, liv についてはその必要性が強調された。両国の学者らが共同で綴り字改定作業に乗り出す中、改革の影響は当然ながら教育の場にも波及し、全米教育協会 (National Education Association) が1898年に12語の簡略綴り字を採択し、その出版物の中で実際に使用もしている¹²。

著名な文芸批評家として活躍し、後に綴り字簡略化運動の中心的存在となるブランダー・マシューズ (Brander Matthews) は、1892年に発表した論

考の中で、イギリス人がアメリカ式綴りを蔑視する風潮に対して、これを不合理なものとして強く批判している¹³。一例として挙げられるのが、語尾の k の脱落に関する指摘である¹⁴。マシューズの説明によれば、当時 hammock の語尾の k は英米共に残存していたが、havoc では英米共に脱落している。almanack ではイギリス式綴りで k を残していたのに対しアメリカ式ではすでに脱落しているが、これはかつては musick と綴られていたものがやがて music に変化したのと同様で、普及の速度こそ異なるものの、英米共通の現象であるという主張である。当時は technique から technic への変化が見られた時期であり、マシューズはこの変化がイギリスよりアメリカでより速く進行しつつあるとしたうえで、その差異の原因を、語をどうにかして自分自身のものとして取り込みたがるアメリカ人と外国の言葉を好むイギリス人との気質の違いに帰している。このあたりに、言語や文学の分野におけるアメリカの独自性の確立を強く意識した、文芸批評家としてのマシューズの思想が伺える。TR はこれに共鳴して、彼との友好を着実に深めながら、政治の場でアメリカニズムを具現化していくのである。

アメリカにとって、1890年代から1900年代にかけては移民流入の最盛期であった。英語圏以外からの移民が急増して、多民族化するアメリカのアイデンティティーが問い直される中、彼らをアメリカ社会に円滑に同化させるうえでの実際問題として、英語の正書法の確立は重要であると考えられた。このような背景の下、世紀転換期のアメリカにおいて、英語の綴り字改革は一定の反響をもって社会に受け止められた。しかし、その活動の財源は研究者たちの自己資金に依存せざるをえず、運動を効果的に展開するには限界があった。

2. 綴り字簡略化委員会 (SSB) による提案

1906年は、アメリカにおける綴り字改革運動にとって、飛躍の年であった¹⁵。3月11日、学術団体からの代表をはじめ研究者や教育者から広く人材

を集めて、綴り字簡略化委員会 (Simplified Spelling Board、以下 SSB) が発足したのが、その出発点である。これは、資産家アンドリュー・カーネギー (Andrew Carnegie) が綴り字改革の趣旨に賛同し、その宣伝活動のために経済的支援を与えることを決意したことにより可能になったものであった。カーネギーの援助額は年間 1 万ドルで、後に 2 万 5 千ドルに増額され、総額では 25 万ドルに上ったという¹⁶。これによって綴り字改革は、アメリカの一般国民の意識に上る問題となり、やがては TR の政治的決断を機に、重大な国民的争点となっていくのである。

SSB の委員長を務めたブランダー・マッシュューズは、劇文学を専門とするコロンビア大学の教授で、文芸批評家としても英語に関わる論考を多数発表していた。そのほか SSB の委員としては、イギリス古典文学と言語学の権威トーマス・ラウンズベリー (Thomas Lounsbury)、出版者のヘンリー・ホルト (Henry Holt)、辞書編纂者のベンジャミン・スミス (Benjamin E. Smith) など、英語に関わる研究者、教育者、実務家たち 26 名が集められた。著名人では、マーク・トウェイン (Mark Twain) の筆名で国民的作家として活躍したサミュエル・クレメンズ (Samuel L. Clemens) も名を連ねている。

SSB の目的は、英語の綴り字の問題に人々の関心を向けて、当時の混乱状態の収束を図ることにあつた。そのため、委員会の名称には「改革」(reform) という語は敢えて使われず、無用な混乱や反感を招かないよう始動時より細心の注意が払われた¹⁷。

発足から間もない 3 月 21 日付けで運動支持者に送付された会報第 1 号では、「最初の一步」と題して、英語が世界で最有力の国際語となるうえで不規則で込み入った綴り字が障害となっているという、SSB の基本的主張が示された¹⁸。読み書きにおいて不要な字が綴りから抹消されることによって、英語の世界的普及、商業や民主主義的理念の促進、子どもたちの学習の効率化、印刷コストの大幅削減などにつながる、と彼らは論じた。簡略綴り字が語の

起源を見えなくするという危惧に対しては、シェイクスピアやベーコンが遺した言葉が当時とは異なる綴りで印刷されていることから明かなように、歴史的事実として英語の綴り字の変化は絶えず起こってきた、と反論している。

マッシュューズはコロンビア大学の講義で、有能な人々が必ずしも綴りに強くないために、話しやすい英語よりも書きやすいドイツ語がビジネス言語としては優位に立っている、との持論を展開し、簡略綴り字の必要性を力説した。これに対して一人の男子学生が「綴りを気にしないでよいのなら、期末試験では合格点をもらえますね」と述べたという逸話が残っている¹⁹。いずれにしても、当時の SSB の主張からは、英語の世界語としての競争力を高めるという問題意識が強く伺える。

最初の会報とともに送付された会報第2号では、具体的な方策として綴り字簡略化の20の原則と、それに基づいて綴り字が確定される300語のリストが提示された。ここで採用された原則は、下記の通りである²⁰。

1. a / ae / a / e と綴る語では e を用いる。例：esthetic, medieval
2. -dge-ment / -dg-ment と綴る語では e を省く。例：abridgment, judgment
3. -ed / -t と綴る語では全て -t を使い、前の子音字は1字だけにする。
例：stopt, mist, washt
4. -ence / -ense と綴る語では -ense を用いる。例：defense, offense
5. -ette / -et と綴る語では te を省く。例：etiquet, omelet
6. gh / f と綴る語では f を用いる。例：draft
7. (1) -ough / -ow と綴る語では -ow を用いる。例：plow
(2) -ough / -o と綴る語では -o を用いる。例：altho, tho, thoro, -boro
(地名)
8. 動詞接尾辞で -ise / ize と綴る語では -ze を用いる。例：criticize,

legalize

9. -te / it と綴る語では e を省く。例：deposit, preterit
10. -ll / -l (-ill / -il) と綴る語では -l を用いる。例：fulfil, instil
11. -ll-ness / -l-ness と綴る語では l を一つ省く。例：dulness, fulness
12. -mme / -m と綴る語では me を省く。例：gram, program
13. oe / œ / e と綴る語では e を用いる。例：ecumenical, esophagus
14. -our / -or と綴る語では -or を用いる。例：favor, honor, labor
15. ph / f と綴る語では f を用いる。例：fantasy, fantom, sulfate
16. -rr / -r と綴る語では r を一つ省く。例：bur, pur
17. -re / -er と綴る語では -er を用いる。例：center, meter, theater
18. 語幹で s / z と綴る語では z を用いる。例：apprize, comprice, surprize
19. s / sc と綴る語では c を省く。例：simitar, sithe
20. 黙字の -ue がある語では -ue を省く。例：catalog, demagog, prolog

このうち原則3については、これがスペンサー、シェイクスピア、ミルトンからテニスンに至るまで、イギリス文学においては普通の用法であったことが補足説明された。さらに52語について mixt: Bible (1611), Shakespeare, Bacon, Milton, Addison のように、イギリスの文学者や欽定訳聖書における用例を逐一挙げて、これらが恣意的に考案されたものではなく歴史的な由来を持つ綴りであることが示された。

原則4(1)で示された plow の例は、当時のアメリカにおいてすでに広く定着しつつあったもので、簡略綴り字を必然的な流れとする主張において、有力な根拠となっていた。SSB の経済的支援者であるカーネギーは、綴り字簡略化運動が一時的流行によるものではなく、すでに起こっている現象の動きを早めるだけのものであるとの主張を、ニューヨーク・タイムズ紙上で展開した²¹。イギリスの plough がアメリカでは plow と綴られるようになったことや、近年まで musick だったものが今や music と綴られていることなど

が例示されている。ここから明らかであるように、綴り字の変化の過渡期にあったアメリカで、複数の綴り字の可能性が現に存在している語に絞ってそこから簡略化を進めるというのが、SSBの方針であり、一般の支持を獲得するための戦略でもあった。

20の原則に続いて、abridgment, accouter, accurst から woful, woolen, wrapt まで300語が、新綴りと旧綴りの左右対称の形で、7ページにわたって掲載された。現代の目で見れば、その後一般に定着しているものと定着しなかったものが同列に混在していることは興味深い。

SSBは、その後も精力的に会報の発行を続けていく。会報第3号（1906年4月）では、ゲルマン語学・文学の専門家でコロンビア大学教授のカルヴィン・トーマス（Calvin Thomas）が現代語学文学協会（Modern Language Association, MLA）で行った講演が掲載された²²。「綴り字の改良」と題されたこの講演では、発音に忠実な綴り字を採用することによって子どもたちの学習の負担を軽減できるという観点から、英語を改良するために綴り字簡略化が必要であることが論じられた。

会報第4号（1906年5月）では、マシューズによる「昨日の綴り字と明日の綴り字」と題する文章で、英語の正書法の歴史が書かれていないことが問題視された²³。話し言葉が人によって多様であるのと同様、書き言葉も人によって多様であり、綴り字の規範と言えるものは現在にも過去にも存在しなかった、とマシューズは主張する。その事実が正しく理解されていないことが、綴り字簡略化の意味を誤解する原因となっているとの分析である。言語とは変化するものであり「変革」されるものではないとの主張で締めくくられ、SSBの急進性を否定しようと努めている姿勢が伺える。

会報第5号（1906年6月）では、すでに提唱されている300語の簡略綴り字について、3種類の辞書（Webster, Century, Standard）による採用例と英米における過去の綴り字改革における採用例が逐一明記された²⁴。OEDは未完成のため含めないとの断り書きが付けられた。

その1週間後に出された会報第6号(1906年6月)では、綴り字簡略化運動に対する誤解に満ちた報道が多いことを問題視し、これらの誤解を払拭するために、必要な情報をあらためて提示するという目的のもと、14項目にわたってSSBの姿勢を再確認した²⁵。すでに定着している固有名詞等の綴りの変更を求めるものではないことなども訴え、改革色を薄めようと努めた。カーネギーによる財政的支援をもとにSSBが活発に発信を続ける一方で、社会には強い反対論も渦巻いており、両者は平行線をたどっていた。この膠着状態は、TRが大統領として行動を起こしたことで、新たな局面を迎える。

3. 大統領令とその波紋

1906年8月24日、TRは大統領令を発し、政府印刷局長チャールズ・スティリングズ(Charles A. Stillings)に対して、大統領による全てのメッセージとホワイトハウスによる全ての文書を、SSBの提唱する300語リストの簡略綴り字を用いて印刷するよう命じた。スティリングは、個人的には簡略綴り字に賛成であり、TRとの会話から大統領がそれを私的に使いたいと考えていることも承知していたが、その彼にとっても、大統領令は予期せぬ出来事であった²⁶。簡略綴り字の使用が大統領からの文書に限定されるとしても、議会経由で送られて来る文書はどのような扱いになるのか、といった問題が生じることが予想され、いずれにしても校閲者を増やす必要があることから、印刷にかかる支出の増大が見込まれる事態であった。

SSBは当然大統領令を歓迎し、マシューズは、簡略綴り字が時間的経済的節約につながり子どもたちの学習にも有益であるという従来の主張を、ニューヨーク・タイムズ紙上で大々的に繰り広げた。SSBは綴り字に関して世論の関心を引くことが重要と認識しており、その意味で大統領令の効果には、支持者たちの大きな期待が寄せられた。しかし現実には、TRの決断は鬱積していた簡略綴り字への反対論が国内外で噴出する契機となったと言ってよい。

イギリスでも、TR の決定は大きな衝撃をもって受け止められた。大統領令の件が伝わると、ロンドンの新聞は早速、綴り字簡略化を経済的に支持し政治的に推進する立役者となったカーネギーと TR の名前を Karnegi と Ruzvelt などと綴り²⁷、大統領令を愚行として嘲笑した²⁸。その論調はまもなく驚きから批判へと変化し、共通言語である英語に関する大きな改革がイギリスへの相談なしにアメリカによって一方的に進められたことへの非難は日増しに高まった。この件についてイギリス国王エドワード7世に対して見解を尋ねる手紙を送った一般国民に対して、手紙を取次げない旨の返事が秘書から届いたという逸話も報じられた²⁹。トーマス・ハーディ (Thomas Hardy) をはじめとする著名な文学者や言語学者による反対も連日のように伝えられた。

国内では、まず新学期を間近に控えた学校関係者から、簡略綴り字に反対する声が上がった³⁰。一方で、州によっては簡略綴り字の導入に好意的な姿勢を示した教育委員会もあったが、それは子どもたちの読み書きの基本的な部分に国内で不統一と混乱を生み出すことを意味していた。

ウェブスター辞書の出版社は、300語の簡略綴り字のうち184語はすでに辞書で認められ153語は推奨されているとし、言葉が認められる拠り所となるのは教育を受けた知的な人々によって使用されること以外にない、との見解を表明した³¹。辞書出版社や出版業界は、綴り字が変わることによりビジネスの機会が期待される利益享受者であると捉えられるため、その発言は慎重にならざるをえなかった。SSB は発表した300語を出発点と位置付けていたため、簡略綴り字が今後増加していくとすれば、辞書や書籍がその都度改訂されることになるという不合理や非現実性は、反対論の論拠の一つとなっていた³²。

簡略綴り字に関する議論では専らその採用の是非が論点となり、表記法自体に関する議論は多かったとは言えない。その中で、through を thru と綴ることについては、これでは through の発音が threw と同じになってしま

うため³³、なぜ throo にしないのかという疑問が、賛成派からも呈されていた³⁴。綴り字簡略化運動がカーネギーの経済的支援によって順調に進行したばかりか、TR の政治的支持によって国民生活に影響を及ぼす次元にまで進展したことで、逆に議論が不十分である印象が生まれるという皮肉な結果がもたらされることになった。そもそも、大統領が言語に関する問題について命令を行う憲法上の権限が存在しないという指摘もなされるほどで、他の政策では成果を上げていた TR も、綴り字の問題に関しては政治的支持を得られない事態であった。

綴り字簡略化に対しては、多くの反対意見が存在したが、無関心層による反応は、皮肉に満ちた次のような見方に代表されるのではないか。「単語とは一字ずつ読むものではなく目に入ってくる文字全体で読むものであること、発音は一旦覚えてしまえば綴りになど全く影響されないことを、この鬱陶しい改革者たちはわかっていないらしい」³⁵。綴り字簡略化が英語の改良であるとの立場から賛成派が挙げる数々の根拠は、総じて、一般市民の問題意識からは外れたところにあったようである。そして、未だ議論が熟さない時点で発せられた大統領令は、拙速な改革という印象に拍車をかけた。

そのような状況下で、12月12日、議会の支出に関する法案が下院で審議された。法案には政府印刷局に関する条項中に「この法律によって計上された予算は、法律によって認められるかもしくは議会その他の機関によって命じられた文書の印刷に関しては、それが英語辞書で一般的に認められている正書法に従っていない限り、執行されない」との一節が盛り込まれていた。これは、TR 自身により発布される文書も含め、政府印刷局が印刷する公文書において簡略綴り字を使用することはできないことを意味する。簡略綴り字賛成派は、エドガー・クランパッカー (Edgar D. Crumpacker) 議員らが超党派で論戦したが、下院は結局この法案を 142 対 25 の大差で可決した³⁶。

敗北を悟った TR は、上院の審議を待たずに下院の意向に従い、政府印刷局に対する大統領令を撤回する意志を直ちに表明した。簡略綴り字は、ホ

ホワイトハウスから政府職員に対する文書、大統領の私的な書簡、その他政府印刷局による印刷を必要としない通信において使用される旨が報じられた³⁷。

4. TR の簡略綴り字支持の背景

TR は SSB の委員長マシューズとは永年の交友関係を持っていた。そのため300語の簡略化綴りの採用に踏み切るにあたって、マシューズの存在が大きかったことは、容易に推測される。決断の理由を二人の人間関係のみに帰すような説明も見受けられるが³⁸、それは短絡にすぎるのではないか。また、TR は元来綴りが得意ではなかったとも伝えられるが、無論、それを政治的行動と直接結びつけることも適当でない。

TR が綴り字簡略化運動に賛意を示した背景として重要であるのは、彼がかねてアメリカの言語と文化の在り方について深い問題意識を持ち、そこから愛国的精神につながるアメリカニズムの思想を発展させてきたという事実である。そこでの TR とマシューズは、互いに志の方向を同じくする良き理解者であった。

TR とマシューズが最初に出会ったのがいつであるかは、正確に明らかになっていないが、書簡のやりとりが1888年まで遡れることから、それ以前から付き合いがあったことは確かである³⁹。1890年代には、TR は歴史家として、マシューズは批評家として、いずれも世に知られる存在となっていた⁴⁰。アメリカの文化的独立の問題は共通の関心事であったので、二人は互いの出版物を読み合い、また書簡を通じて意見交換を行う間柄であった。

1891年に、マシューズは「ブリティシズムとアメリカニズム」と題する論考を雑誌に発表して、大西洋を挟んだ英米両国でそれぞれに英語が変化を遂げていることについて、これを退廃ではなく言語の健全な発達であると主張した⁴¹。TR はこの論文を賞賛してマシューズに書簡を送っている⁴²。ここでの「アメリカニズム」とは「アメリカに特有な英語の用法」というこの語の本来の意味として用いられているが、そこにアメリカ的精神やアメリカ的

独自性といったニュアンスが加えられ、アメリカニズムという語は意味を広げていく。この広義の用法に基づき、TR がアメリカの文学界や社会全体を考察対象として「真のアメリカニズム」を発表するのは1894年のことである⁴³。都市化と多民族化によって変化の只中にあるアメリカを批評するにあたって、国民を統合する軸となる英語の問題は、TR にとって重要性を持ち続けた⁴⁴。

1892年に、マッシュューズは「アメリカの綴り」と題する論考で、アメリカ人がイギリスの正書法から逸脱して英語を劣化させているというイギリス人の批判に反論して、悪いのは綴り字システム自体であり改革が必要なのであると主張した⁴⁵。ここでマッシュューズは綴り字簡略化運動を支持する立場を取っており、それが後年の活動につながった。TR はこれに対しても賛同する旨の書簡をマッシュューズに送っている⁴⁶。

マッシュューズのこの論文に対する新聞紙上での反響をめぐって記された TR の次の書簡では、後に SSB の一員となるラウンズベリーが話題になっている⁴⁷。TR とマッシュューズの往復書簡に綴り字簡略化の話題が初めて現れるのも、このときであった。国際的に著名な言語学者であり文学にも造詣の深いラウンズベリーは、centre を center と綴るような変化はアメリカ的と批判されるが、シェイクスピアなどのイギリス人作家も -er という綴りをむしろ多く使っていることを指摘し、綴りの変化を正当化していた。これは、アメリカの文化的独立が劣化とは異なることを論理的に裏付けようとする主張であり、TR の好むところであった。こうして、TR がアメリカニズムを考察するうえで、ラウンズベリーは一目置かれる存在となっていく。

TR とマッシュューズの往復書簡と友好関係は、その後も途切れることなく続き、3月にSSBが発足する1906年も、1月1日から早速やり取りが行われている。互いの論文に関する意見やマッシュューズの娘の結婚が話題になる中で、綴り字の問題にはなかなか言及されない。TR が「綴り字についてはもちろん君に賛成だ」と初めて書き送ったのは5月のことである⁴⁸。SSB が宣伝活

動を本格化させていた時期、これ以外のやり取りは見られない。この件に関する政治的方向性を熟考していたためだろうか。その後 TR は、SSB による300語の簡略綴り字リストを取り寄せるよう政府印刷局長に命じた後で、マッシュズにその旨を、弾むような調子で書き送っている⁴⁹。

大統領令を発令してから翌年始めまでの TR からの書簡は、どれも極端に短い。大統領への逆風が強まる中、彼を励ますかのようなマッシュズの書簡に対しても、簡略綴り字に関する発言は控えたいと述べるばかりである。大統領令撤回を決定した後には、「戦って新しい綴りを押し通すことはできなかった。不名誉な負け戦に入り込むのが無益どころか有害であることはわかりきっていた」と書き記している⁵⁰。翌1907年の SSB での演説の依頼も断っており⁵¹、この問題に関わる TR の敗北感が強く感じられる。

むしろ興味深いのは、TR が政府印刷局長スティリングズに宛てた8月27日付け書簡ではないか。「何か革命的なことをしたり遠大な政策を開始しようという意図は毛頭ない。目的はただ、政府が国民感情に後れを取らずに付いていくこと、そして同時に、最も現実をよく知っている有能な教育者たちや最も造詣の深い研究者たち——ラウンズベリー教授のような——の見解に付いていくことなのだ」⁵²。この書簡で TR は、新奇なことを行っているのではないという SSB の主張に近いことを述べ、簡略綴り字の妥当性を説明している。それに加えて、ラウンズベリーの名前を敢えて目立つ形で明示しているところに、この決断が彼のアメリカニズムに関わる古くからの問題意識の延長上にあることが読み取れるのではないだろうか。

TR の簡略綴り字支持に関する背景として、付随的ではあるが、政府印刷局の印刷に関する支出の急増が当時の予算に関する重要課題となりつつあったことにも注目しておくべきであろう⁵³。SSB が組織される1年前の1905年、国勢調査局事務長ウィリアム・ロシター (William S. Rossiter) は、連邦と州の公文書印刷の現状に関する分析結果を発表した⁵⁴。それによると、連邦政府の印刷に関わる支出は、1880年には203万4750ドル、1890年には490万

5881ドルであり、1904年には708万906ドルに上っていた。支出額は1896年から1904年の8年でほぼ倍増しており、1910年までに1000万ドルに達する見通しとなっていた。この問題について、TR 自身も SSB 発足前、1905年の一般教書演説において、議会に支出の見直しを求める中で、公文書印刷が大幅な支出削減が可能な分野であると述べていた⁵⁵。

綴り字簡略化運動においては、語尾の e をはじめとする黙字を削除することによる時間的経済的節約効果がしばしば謳われる。米国文献学協会の1893年大会における簡略化綴り字に関するシンポジウムでは、その節約効果の具体的な数値が明らかにされている⁵⁶。それによれば、黙字の e の削除により全文字数の4パーセント、重複する子音字の削除により1.6パーセントの削減になるという。これらを含めた簡略綴りによって、従来の100文字が83文字で表せるので、文字数は6分の1の節約となる。この計算を適用すれば、理論上、文字数の減少による紙代、インク代にかかる若干の費用削減が見込まれ、簡略綴りは節約に貢献することになる。綴り字の問題が「節約」との関連で主張されることは、当時としても一般にはやや奇異に感じられたかもしれないが、政府印刷局の支出削減が喫緊の課題とされるに至って、一定の説得力を持つものとなったのである。

結 び

TR の政策の中でも、綴り字改革ほど強く一般大衆の反響を引き起こしたものはなかったという見方がある⁵⁷。その意味でも、国内はもとより大西洋を越えて議論的となったこの一連の出来事は、再考の余地が大きいと言えるのではないか。

TR の大統領令は撤回されたが、それによって綴り字簡略化運動が雲散霧消したわけではない。SSB によって作成された300語簡略綴り字リストは、TR の名を冠した綴り字本となり⁵⁸、翌1907年には NEA が協会の出版物に同リストの綴り字を使用することを決定している。カーネギーは、国外から

の批判に应えて、イギリスのみならずカナダからも代表を加えて SSB を再編する意志を、大統領令直後から表明していた⁵⁹。SSB はその後、国外からの批判に対応し組織を国際化し拡大して活動を継続する。マシューズは、1906年には敢えて踏み込まなかった本格的な表音的綴り (phonetic spelling) の問題についてさらに考察を深めていった⁶⁰。SSB はその後も存続し、1919年にカーネギーの死去により財源を失うまで活動した。

TR の盟友として同時代に活躍した政治家ヘンリー・カボット・ロッジ (Henry Cabot Lodge) の回想によれば、TR への批判の最たるものは、彼が思慮分別なく衝動的に行動するというものであった⁶¹。簡略綴り字の採用とその方針撤回も、おそらくは勢いに任せた軽はずみな決定の一つと認識されたことであろう。一方、TR の下で司法長官を務めたチャールズ・J・ボナパルト (Charles J. Bonaparte) の回想によれば、大統領が簡略綴り字の問題に深入りしすぎたにもかかわらず、平均的な人々は、彼に対して以前と変わらぬ敬愛を抱き続けたという⁶²。綴り字改革の構想こそ挫折したかもしれないが、1906年の TR は、日露戦争を調停した前年の功績により、合衆国大統領として初めてノーベル平和賞を受賞している。アプトン・シンクレア (Upton Sinclair) の小説『ジャングル』 (*The Jungle*) を通して食肉加工現場のずさんな衛生管理の実態が暴露されて社会的不安が広がる中、TR が食肉産業の徹底的調査の開始を農務長官に命じ、最終的には議会による食肉検査法の制定に至ったのも、同時期に当たる⁶³。全体としては、大統領として圧巻のリーダーシップが発揮された年であった。

このように、綴り字簡略化運動に TR が果たした役割は、時に彼の強烈な個性の問題に帰され、時に他の幾多の業績の陰に隠されてしまう傾向にある。しかし、これを彼の思想的背景との関係から位置付けることにより、新たな光景が見えてくる。TR は、アメリカの文化的独立の文脈の中で、綴り字簡略化運動に与した。その試みは世論と議会の反対に遭って遮られたが、彼の後半生の重要課題であるアメリカニズムの追求は、この後も続くことに

なる。

註

1. 綴り字簡略化に関する TR の大統領令は、以下に見られるようにしばしば ridiculous と評される。John M. Thompson, “Theodore Roosevelt and the Press.” Serge Ricard, ed., *A Companion to Theodore Roosevelt* (Chichester, West Sussex: Wiley-Blackwell, 2011) 230.
2. 綴り字簡略化運動の歴史に関する本章の記述にあたっては、主として次の文献を参考にした。Henry Gallup Paine, *Handbook of Simplified Spelling* (New York: Simplified Spelling Board, 1920) 1-32. George Philip Krapp, *The English Language in America, Volume 1* (New York: Century, 1925) 328-350. H. L. Mencken, *The American Language: An Inquiry into the Development of English in the United States, Supplement 1* (New York: Alfred A. Knopf, 1945) 27-33. John W. Clark, “American Spelling.” G. H. Vallings, *Spelling* (London: Andre Deutsch, 1954) 174-192. Julie S. Amberg and Deborah J. Vause, *American English: History, Structure, and Usage* (Cambridge: Cambridge University Press, 2009) 113-118.
3. イギリスにおける綴り字改革については、次のような研究書がある。山口美知代『英語の改良を夢みたイギリス人たち——綴り字改革運動史一八三四——一九七五』（東京：開拓社、2009）
4. 以下はその最初のものであり、アルファベットを話題とする内容である。Benjamin Franklin, Letter to Polly Stevenson, July 20, 1768. in William B. Willcox, ed., *The Papers of Benjamin Franklin, Volume 15, January 1 through December 31, 1768* (New Haven: Yale University Press, 1972) 173-175.
5. Noah Webster, *Dissertations on the English Language: With Notes, Historical and Critical* (Boston: Isaiah Thomas and Company, 1789) 20.
6. Noah Webster, *A Collection of Essays and Fugitive Writings* (Boston: I. Thomas and E. T. Andrews, 1790).
7. 1790年以降、ウェブスター自身の日記からさえも、急進的な綴りは見られなくなったという。Krapp, *The English Language in America, I*, 334.
8. ウェブスターは *American Spelling Book* で、publick, favour, neibougher, head, prove, phlegm, his, give, debt, rough, well などの綴りが好まれるのは古くから用いられているのでやむをえないとしても、いずれは public, favor, nabor, hed, proov, flem, hiz, giv, det, ruf, wel に取って代わられるだろうとの確信を述

- べていた。しかしこの教則本は全体としては保守的な内容であった。Krapp, *The English Language in America*, I, 337.
9. Richard J. Moss, *Noah Webster* (Boston: Twayne Publishers, 1984) 109-110.
 10. 1843年にウェブスターが死去した後 *An American Dictionary of the English Language, Corrected and Enlarged* の権利を継承した Merriam-Webster 社は、その後数回の改訂版の出版を経て、1890年には *Webster's International Dictionary of the English Language* を刊行した。
 11. この時代に関する記述は、主として次の文献に基づいている。Paine, *Handbook of Simplified Spelling*, 12-14.
 12. catalog, decalog, demagog, padagog, prolog, program, tho, altho, throu, thorofare, turu, thruout の12語。
 13. Brander Matthews, "As to 'American Spelling'." Brander Matthews, *Americanisms and Briticisms: With Other Essays on Other Isms* (New York: Harper and Brothers, 1892) 32-59.
 14. Matthews, "As to 'American Spelling,'" 42-43.
 15. 本章では、主として簡略綴り字委員会が発表した文書とニューヨーク・タイムズの記事をもとに、事実の経過を追いつつ当時の社会的反響を検証する。この問題に関する1906年の事情を比較的近い時代に振り返った記録として、次のものがある。Mark Sullivan, *Our Times 1900-1925, Volume III: Pre-War America 1906-1908* (New York: Charles Scribner's Sons, 1930) 162-190.
 16. Sullivan, *Our Times 1900-1925, III*. 172.
 17. *The New York Times*, March 13, 1906. 6.
 18. Simplified Spelling Board, "Circular No. 1," March 21, 1906.
 19. *The New York Times*, March 14, 1906. 2.
 20. Simplified Spelling Board, "Circular No. 2," March 21, 1906.
 21. *The New York Times*, March 22, 1906. 8.
 22. Calvin Thomas, "The Amelioration of Our Spelling." Simplified Spelling Board, "Circular No. 3," April 2, 1906. *PMLA*, Vol. 17, No. 3, 1902. 297-311.
 23. Brander Matthews, "The Spelling of Yesterday and the Spelling of Tomorrow." Simplified Spelling Board, "Circular No. 4," May 7, 1906.
 24. Simplified Spelling Board, "Circular No. 5," June 18, 1906.
 25. Simplified Spelling Board, "Circular No. 6," June 25, 1906.
 26. *The New York Times*, August 25, 1906. 1.
 27. TR は自分自身の名前の発音については、ある書簡の中で As for my name, it is pronounced as if it was spelled "Rosavelt." That is in three syllables. The

- first syllable as if it was “Rose.” と述べている。Theodore Roosevelt, Letter to Rev. William W. Moir, October 10, 1898. Patricia O’Toole, ed., *In the Words of Theodore Roosevelt: Quotations from the Man in the Arena*, Cornell University Press, 2012. 169.
28. *The New York Times*, August 26, 1906. 1.
29. *The New York Times*, September 14, 1906. 1.
30. *The New York Times*, August 26, 1906. 2.
31. *The New York Times*, September 5, 1906. 8.
32. *The New York Times*, October 25, 1906. 1.
33. 現代の辞書では、これらの語はいずれも throo に相当する発音が示されているのが普通である。
34. *The New York Times*, September 9, 1906. 16.
35. “Sylvanus Urban’s Notebook.” *The Gentleman’s Magazine*, Volume 301, July-December 1906, 308.
36. *The New York Times*, December 13, 1906. 3.
37. *The New York Times*, December 15, 1906. 6.
38. Thompson, “Theodore Roosevelt and the Press.” Ricard, ed., *A Companion to Theodore Roosevelt*. 230.
39. Lawrence J. Oliver, ed., *The Letters of Theodore Roosevelt and Brander Matthews* (Knoxville: University of Tennessee Press, 1995) xix.
40. TR は政治家として活動を開始する以前より、歴史家として数々の著作を発表している。Theodore Roosevelt, *The Winning of the West: The Spread of the English-Speaking Peoples*, 4 vols. (New York: G. P. Putnam’s Sons, 1889-96) は代表作であり、敬愛する歴史家フランシス・パークマン (Francis Parkman) に献呈されている。英語を用いる民族の歴史は、TR の歴史家としての重要テーマであった。
41. Brander Matthews, “Briticisms and Americanisms,” *Harper’s Monthly* 83, July 1891. 215-222.
42. Theodore Roosevelt, Letter to Brander Matthews, June 23, 1891. Oliver, ed., *The Letters of TR and BM*. 26.
43. Theodore Roosevelt, “True Americanism,” *The Forum*, April 1894.
44. 詳しくは次を参照。鈴木健司「セオドア・ローズヴェルトのアメリカニズム三態——その形成と変容」『同志社女子大学学術研究年報』53 (2), 2002. 134-155.
45. Brander Matthews, “American Spelling,” *Harper’s Monthly* 85, July 1892. 277-284.

46. Theodore Roosevelt, Letter to Brander Matthews, June 27, 1892. Oliver, ed., *The Letters of TR and BM*. 38.
47. Theodore Roosevelt, Letter to Brander Matthews, July 27, 1892. Oliver, ed., *The Letters of TR and BM*. 39.
48. Theodore Roosevelt, Letter to Brander Matthews, May 17, 1906. Oliver, ed., *The Letters of TR and BM*. 173.
49. Theodore Roosevelt, Letter to Brander Matthews, August 22, 1906. Oliver, ed., *The Letters of TR and BM*. 173.
50. Theodore Roosevelt, Letter to Brander Matthews, December 16, 1906. Brands, ed. *The Selected Letters of TR*. 446.
51. Theodore Roosevelt, Letter to Brander Matthews, April 1, 1907. Brands, ed. *The Selected Letters of TR*. 178.
52. Theodore Roosevelt, Letter to Charles A. Stillings, August 27, 1906. Brands, ed., *The Selected Letters of TR*. 434.
53. 政府印刷局の歴史に関する概況の解説としては、次の資料が有益である。U. S. Government Printing Office, *100 GPO Years 1861-1961: A History of United States Public Printing, Sesquicentennial Edition* (Washington DC : U. S. Government Printing Office, 2010).
54. William S. Rossiter, “The Problem of Federal Printing,” *The Atlantic Monthly*, Vol. 96, 1905. 331-344.
55. Theodore Roosevelt, Message Communicated to the Two Houses of Congress at the Beginning of the First Session of the Fifty-ninth Congress, December 5, 1905. Theodore Roosevelt, *Presidential Addresses and State Papers, May 10, 1905 to April 12, 1906* (Whitefish, MT : Kissinger, 2012. Reprint of New York : Review of Reviews, n.d.).
56. F. A. March, Opening Address. Symposium on the Question “Is simplified spelling feasible as proposed by the English and American Philological Societies ?” *American Anthropologist*, Vol. 6, No. 2, April 1893. 137-148.
57. H. W. Brands, *T. R. : The Last Romantic* (New York : Basic Books) 555.
58. 現在は *The Roosevelt Phonetic Spelling Book* (Fort Washington, PA : Eastern National, 2010) として出版されている。
59. *The New York Times*, September 4, 1906. 9.
60. Brander Matthews, “Simplified Spelling and ‘Phonetic Reform.’” Brander Matthews, *The American of the Future and Other Essays* (New York : Charles Scribner’s Sons, 1909) 219-231.

61. Henry Cabot Lodge, *Theodore Roosevelt: A Memorial* (Boston and New York: Houghton Mifflin) 36.
62. Sullivan, *Our Times 1900-1925*, III, 162.
63. この経緯については、次の文献が詳しい。Lewis L. Gould, *The Presidency of Theodore Roosevelt* (Lawrence, KS: University of Kansas Press, 1991) 165-169.